

デート・ア・無限サバイブ・鏡像の戦士外伝・神衣・ライフ

にやはっふー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

別作品『デート・ア・無限サブイブ・鏡像の戦士』の外伝的な作品です。

物語裏で色々してたり、デアラのアンコールを意識した物で、それにオリ主と、彼が関わり変わった物語で起きる人物達の物語。

仮面ライダー龍騎の、仮面ライダーオーデインこと、神崎神衣と精霊達、五河士道くんの日常で起きる、物語。

神衣くんと精霊ライフ、始まります。

目次

十香・ト・デート	1
狂三・スナイパー	12
真那・サポート	24
オーデイン・ライフ	32

十香・ト・デート

それはまだ四糸乃と出会う前であった。

クラスが違う中で、隣クラスから怒声がいつものように聞こえる。いつものことだと思っていると、だっだっだっど誰かが来た。

「神衣く今度デートだっ。シドーに私の気持ちを思い知らしめてやるさっ」

そんなことを言つて、精霊十香はそう言い、いじけながら去っていく。

「……………ふむ……………」

静かにこの騒動の事件を考えて、

「殺すか」

「待つてくれ神衣!!」

標的が来たので、躊躇いもなく椅子を持ち上げながら、待て待てと、「十香には悪いけど、今度は無理なんだっ」

「ほう、まあ十香の依存的なところを治させるにはいいかも知れないが、ほぼ勢いのなのかな……………俺は問題ないが、お前の態度が問題の恐れがあるし」

ともかく椅子をぶん投げようか考えるが、渋々やめておく。

十香は断る事に土道と行動を共にしたが、り、デートしたがる。今回は察するに断られ、腹いせに別の奴とデートされる思いを思い知らせてやるつもりだろう。

効果あるか?と思うが、土道は神衣ならなと納得しそうだが、そんな反応見られたらストレスはマツハで危険値になるだろう。言っても分からないから、後悔してもらおうほど断罪しておかなければいけない。十香がぱつと見、自分以外とデートして悲しいと思いたと思うほど、弱つてもらわないとダメだ。

そんなことを考えながら、彼は十香と休日買い物にでも行くかと言う感覚で、土道と別れることにした。

今日は図書室で少し調べ物、もとい、少し色々裏作業するつもりなので、図書室で簡単な作業をする。こういう言い訳をして、資金稼ぎ

などしている。悪いことはしていない、ただ存在しない人物になって、運営しているだけだ。

その時ついでに彼女、フラクシナスの司令官、琴里にも連絡しておく。

『チツ、そう言うことね。土道ったら……通りで十香のストレス度が上がったはずよ』

「妹よ、とりあえずあれの始末は任せるが、十香のデートは俺でも問題ないか？」

『それは問題ないでしょう、一応、向こうからの指名だしね。十香とはどこを歩く気？』

「簡単にシヨツピングか、食べ歩きかだな。映画館や遊園地は、土道が一番がいいだろうから却下だからな」

『さすが私のお兄ちゃん♪ 最初の映画や遊園地は、やっぱりイベント的に後々保険として用意しておきたいから、食べ歩きでお願い。それで場所は？』

「そこだな、後で琴里経由で待ち合わせなど合わせればいいだけだし………単純にうまい店周りで、無理に用意した店じゃないところを」
『OK♪ お店はお兄ちゃんがリストアップしておいて。後は何名かサポートに回すわ』

「そうか、助かるよ琴里。さすがにお金も無限にある訳ではないと知ってもらうため、ギリギリの目線にしておきたいが、手持ちの不安などがあるからね」

今回の土道以外デートで、なるべく人の生き方を教えるため、お金は無限にないなど、普通のお店とはなにかなど、そう言ったことを十香に教える方針に行動する。そんなやりとりの中、

「！」

『? どうしたの?』

「いや、気の」

所為と言おうとしたが、瞬間、スタンガンが放たれる。

とつさのことで窓から逃走。すぐに近くに生える木などを利用して下に下りると、襲撃者も同じように下りてきた。

「……………なにようだ」

「……………」

「状況は!？」

「現在カメラを……………映像出ますっ」

フラクシナスの巨大モニターには、鳶一折紙と神崎神衣が写り、鳶一折紙は片手にスタンガン、片手に乙女の魔法の薬が染みついたハンカチがある。

「なにを……………音声っ」

「了解っ」

そして、

『鳶一さん、いったい……………いや、なんとなく思い当たる』

『そう、話が早くて助かる』

『……………十香と本当につき合えと言わないでくれ』

『そんなこと言わない』

無表情のまま、じりじりと距離を測り合う二人。鳶一折紙は静かに、

『私はただ、夜刀神十香と結婚しろと言いに来ただけ』

『俺の予想を遙かに越える恋敵撃墜方法!!?』

『できれば新たな命があれば、私は全力で祝福する』

『もつとタチが悪いッ』

それに関してフラクシナスメンバー全員も啞然となる。

まさかここまで相手を潰すのに全力を出すとは、クルー全員戦慄。いや、一人除いて頷いている者が……………

『ともかくここではらちが明かない、少し来て』

『断る、行けば最後しか考えられんッ。逃走っ』

『チッ』

そう小さく舌打ちして、サイレンサー付きの乙女の嗜み銃を取り出し、発砲。それを避けながらSOSコールが神衣から来る。

「チッ!! アノアマアア……………私のお兄ちゃんになにやらせようとしてるのよッ。警護班ッ、ともかく現場へ急行!! 弾痕などの処理と、

鳶一折紙の撃墜ッ。この様子じゃ、デート中もなにするか分からないわっ。ただちに神衣兄を回収して!!」

『了解ッ』

そんなことがありながら、後日である。

フラクシナスメンバーは今回は土道ではなく、神衣のサポートに周り、彼らのデートと言うより、買い物などと言った感覚だろう。お互い仲が良いが、彼の好感度は土道よりはやはり下だ。

「まあ、本当は土道より、神衣兄の方が女の子の扱いは上なんだけどね」

「えっ、そうですか?」

女性クルーが疑問符を浮かべ、それに対して、

「そうよ、通話は神衣兄には繋がってないわね? その状態で待ち合わせ場所の周りを見せて」

「了解」

そう言われ操作すると、すぐに分かる。

彼自身は安物、よくてそこその衣類のはずが、そのルックスだけで極まり、鋭い目つき、落ち着いた雰囲気、本を読む様は、まるで、「そう、まるで少女漫画かなんかのような、クール系男子のように立ち振る舞いつ。言っちゃ悪いけど、土道より神衣を兄として紹介した方が同姓の友達からいいなと言われる数は数知れず!! なによりその見た目と共に、中身まで完璧超人!!!」

そう、琴里がある意味学業よりこちらを優先できるのは、全て神衣が勉強のサポートを前々からしてくれていたこともある。教えるのも上手で、友達も塾に行くより、神衣に教えて欲しいと頼みに来るほどである。

神衣がただいるだけで、道行く女性が少し見たり、少しこそそ話し合う人もいる。その様子に少しだけ嫉妬する男性クルーがいるがいまは無視。

「そして極めつけは……来たわね」

『おーいっ、かーいむーいーいー』

『十香か』

そう言つて普通に歩き出す二人。その様子はまさに美男美女。それもそうだ。十香は恋人にしたいランキングを現れてから上りだした存在。加えて神衣は、

「こちらの調べでは、恋人にしたい男性ランキング堂々一位のようだな」

「そうよ令音。お兄ちゃんはクール系キャラ全ての覇者よ、正直神衣兄と買い物に行くだけで勝ち組感はん端ないわよ」

その様子だと琴里は何度も体験している様子であり、クルーは、

「まあ確かに、神衣くんと土道くんを比べるのは、ねえ」

「大人の落ち着きがありますね、彼からは」

眼鏡を直しつつ社長の幹本と、早過ぎた倦怠期川越が頷き合う。

「実は彼とは分野は違いますが、パソコンなどの電気機器の話では、馬が合いますね」

そう言うのは次元を越える者である中津川も頷き合う。

「あつ、確かに、ぱつと見なら神衣くんですね、土道くんもいい人なんですけど」

「まあ、見た目なら神衣くんですね。あの歳にない落ち着いた雰囲気がありますからね」

と、藁人形椎崎と、保護観察処分箕輪が言い合う。

「そう言うことよ、まあ、恋人になると考えれば現実には別だけどね。神衣兄はスペック高すぎだから、そうそうできないし………私が潰すし」

最後の言葉だけ、小さく呟かれた。誰にも聞こえなかった（聞こえなかったこととしてください）

「あつ、十香ちゃんと神衣くん、移動開始しました」

「そのまま監視お願い。念のため、警護班は鳶一折紙に警戒して」

その後はまあ楽しいデート、と言うよりかは、

「友人との食べ歩きですね」

川越の一言に、みんなが頷き合う。

だが令音、解析官である令音だけはいやと眩く。

「彼はよくやってるよ」

「そう言い、音声を拾う。」

『神衣、あの駅で使ってる、ピツッてるものはなんだ!? 私もしてみたいぞっ』

『あれは、切符はもう知ってるよな? 切符のお金を前もって払って置いて、その代金を払ってるんだ。駅をよく利用する人が、込んでるときとかに使用するものだよ』

『おお、そうか。なら私はまだだな……まだ駅の名前がよく分からぬ』

と言う会話に、あれ?と、

「十香ちゃん、切符とか、駅のこと教えましたっけ?」

「ここに来る前に、バスなどを使用したときに、雑談していた。その時、十香が電車を見ていたからね。その時に」

「いつの間に……そう言えば、私も知らないうちに色々教えてもらったっけ」

琴里が懐かしみ、なんだか教鞭取れますね〜と言う会話の中、令音は静かに彼を見続ける。

「? どうしたの?」

「いや……年の割に、引き出しが多いと、感心してただけだよ」

「そう言い、モニタリングしていると、警報が鳴る。」

「警戒ツ、イーグルIから連絡が途絶えましたッ。続いてII……」

「通信の最後に伝令あり、白いものがとっ」

「ちっ、やっぱり来たか鴛一折紙!! デートの邪魔は千歩譲ってもいいけどツ、神衣兄に変なことさせようとするのだけは許さんツ!!! ついでに士道の分も入れて、常日頃の恨みをはらしてやるわ!!!」

アメをかみ砕き、鬼の形相で指揮をする琴里であった。

「!!」

「? ほうした? ふあむい?」

口の中にたい焼きを入れて喋り、ゴツクンと飲み込む十香。それ

に、

「いや、いま殺気と怒気と、震える者達の気配を少々……………」
「？」

「気にするな」

「………」
いろんなところを巡りながら、十香は楽しそうに微笑んでいる。

「………」
と、不意に彼女はしんみりな顔になり、静かに、

「本当にだな……………」

「？ なにが」

「世界は敵だけじゃない……………シドーの言う通りだ」

「………」
そう言いながら、様々な行き交う人を見る十香。その顔を見ながら、僅かに考え込む。

「……………もう機嫌は直ったか？」

「むっ、それは少し……………けどまあ、神衣に免じて許してやる」

「………」
そんな会話をしながら、神衣は目の前の精霊を見る。その様子は、
(やはり人だな)

鏡の中から、控えているモンスターを見ながら下げる。

(実は攫う算段をしていたが……………はあ)

「………」
こんな楽しんでそうにおはぎを頬張る少女を見て、下手に手を出すのは悪手と判断する。むしろばかばかしいと、そう思う。

「………」
彼は研究者、良くも悪くも、目的のために手段を選ぶ気は無い。ただ最良で最短を選ぶだけだ。

(近くに居るんだ、気長にやろう)

「………」
そう思いながら、あまりの食いつぷりに公園で飲み物と共にいただく。

「………」
普通の公園で、僅かに神衣もおはぎを食べつつ、あんこがついた指を舐め、横を見ると、

「十香、口元にあんこがついてるぞ」

「ん？ うん……………」

「………」
それでもまだ食べ続ける十香。仕方ないかと立ち上がり、前に立ちハンカチで拭おうと少ししやがむ。

「あまり食べ過ぎると晩飯が入らないぞ」

「むっ、それは困るな……………」

大人しく拭かれるため、顔と言うより、口元を突き出す十香。
そして、

(神は私の味方……………)

何故かいた不審者を、乙女の嗜みで蹴散らし、いいポジションを取り、スナイパー体制で、神衣と十香を見る。いいタイミングだ。

鳶一折紙のシナリオで、このままゴム弾(対人製高性能)を打ち込み、奥手な彼を後押しする。

後は二人を祝福するイベントが発生、事故キス。なんて素敵な響き、自分も愛しの人としようかと心に決めながら、気を失った神崎神衣を回収し、乙女の説得をするだけだ。

いまは仕方ない、素敵イベントだけでもいい。彼女もこれで彼を意識するだろう。神崎神衣と夜刀神十香、二人とも神合わせだ。祝福しよう。その為の薬も用意した。

不適な笑みを見せ、音の消えた弾丸が放たれた。

(殺気!!)

妙な気配を感じたが、体制がまずい。

(避ける、十香に当たる。防ぐ、十香の前で? モンスター論外)

まだ正体を隠している身である自分が、そう簡単に力を引き出せない。
い。

目を瞑り、口元を突き出しているが、琴里達がいる。これではと、

(軌道は……………俺の頭か!? なんでだ!!)

こうなれば仕方ない、全く、備えあれば憂いなしだが……………

(……………友人との食べ歩きって、こんなだったか神崎?)

僅かに疑問に思いながら、

「ほら拭い……………!!!」

「ん、すまぬ神衣。つと、どうかしたか?」

「い、いや……………」

「神衣くんはゴム弾激突しました!!」

「なんですって!!? 神衣兄は無事なの!？」

映像で出ると、口元をすぐに拭った彼はすぐに身体を伸ばし、背中に被弾した。

だが彼は気にせず、動揺を隠す。

「これって」

「ああ、彼は念のため、服の下に防護服を着てもらっていた」

「でかしたわ令音っ、お手柄よ!!」

彼の進言から、対鳶一折紙用装備を、衣類の下に着込んでいた神衣。その一撃を、うまく防いだ。

「ですけど骨にヒビが入ってる恐れがありますッ、む、むしろよく一般人の頭部へ討ちましたねあの子……………」

その言葉に、琴里から、冷気のような怒気が、放たれた。

「よし殺そう」

その後、十香の視界の外で僅かに戦争が起きたが、神衣は必死に隠した。

(もう一度思う、これが普通の食べ歩きか神崎……………)

遠い目で背中中の傷を抑える。ヒビも折れも無いが、さすがに響いた。

その後は遠くから弾丸の後や、グレネードらしき音も聞こえ、よくパニックにならないと思う。精霊より彼らの方が世界の危機ではないか？

気づかれないようにフォローしつつ、静かに歩く中、十香はもう機嫌良さそうに歩く。鼻歌も歌い、その様子にほっとする。

(もうこれでもにも起き……………)

「ん? 神衣、この店はなんだ?」

「ん」

そう言われたとき、メイド喫茶なるものが見えた。ああと、

「これは可愛い女の子が、メイドと言う職業に成りきって、接客するお店だよ。普通の喫茶店と違って、お客さんは自分を雇ったご主人様やお嬢さまと言う職業な。まあほとんど可愛い女の子と触れ合いたい客か、可愛い服着てみたいって子がやってたりする」

「そうなのか、確かに可愛い……………」

「……………」

その時、メイド服を見ていた十香は、

「あ……………」

店から出た。バカの姿を見た。

インカムから警報が鳴り響く。十香からオーラが見え始めた。

「……………シドー……………お前、何故ここにいる?」

「かかかかかかかか、かむむかむかむか神衣に十香っ!」

そこにいたのはまさに店から出てきた友人、五河士道。インカムからもバキツと言う何かが砕けた音が聞こえた。

「……………友よ、十香の頼みを断り、ここに来たかったのか」

「待ってくれっ、誤解しないでくれ神衣っ」

そんなことを言うが、霊力が肉眼で見えている気がするほど、十香の機嫌は悪いのが分かった。

「シドー……………シドーは私というより、他のおなごと一緒によかったのか……………」

「ち、違うんだ十香っ、これはその」

「……………友は死んだ」

「か、神衣っ。お前まで待ってくれっ、違うんだ神衣っ」

そして空からも侮蔑の視線を感じる。琴里だろう。

「よし、十香。今日は俺ん家で飯にしよう。琴里も呼んでな」

「……………わかった……………」

嵐のように去る十香に、士道が待ってくれと言うが、

「来るな馬鹿者っ、バーカ、バーカ。うわああああああああああ
そう言っって走り出す。」

「と、十」

「歯を食いしばれええええええええええ」

「ぐっふああああああああああああ」

歯と言いつつ腹を殴って、神衣も後を追う。

腹を押さえ、ま、待ってと言う土道の後ろから、

「おい土道どうしたんだい？　メイドさんの有意義な時間で、腹満腹か？」

そう言い、友人殿町が現れる。

後で知るが、殿町から色々頼まれ、一人で来ていたが、たまにはお友達も連れてきてくださいとメイドに言われ、土道に白羽の矢が立つ。

神衣とも知り合いだが、あれは全てのメイドを奪うイケメンと嘆くため、神衣は誘われなかったのだった。

こうして、十香とのデートは終わりを告げた。数多の傷を残して

……………

狂三・スナイパー

それはとある地方、隠された研究機関。

『アドベント』

黄金に輝く鳳凰が舞い上がり、壁や床などの建物を破壊し、鏡から多くの怪物達が現れ、職員を襲う。

だがケガは負わず、気絶させながら、武装した者、顕現装置・リアライザと言う物を装備、武装した者達が現れるが、それは止まらない。

銃弾、レーザーと言う高エネルギー弾が躊躇い無く放たれるが、

『シールドベント』

全て盾で防がれ、そして、

『ソードベント』

瞬間、二振りの剣を持つそれに斬られる。一人が斬られるともう一人がと、一人一人が把握する瞬間、その前に地に倒れ、制圧完了する。

『弱いな………』

そう言い、黄金の戦士、仮面ライダーオーデインはゴルトセイバーを捨て、静かに歩き出す。剣はすでに鏡のように砕け散り、欠片すら残さず、そのまま歩く。

『………ここか』

分厚い扉の前に立ち、静かに手を置く。

それだけでそれが粉々に吹き飛び、静かに中に入る。すでに制圧済みであり、静かに特性のメモリーチップを差し込み、中のデータなどを取り込み始める。

『………私を見ていて楽しいか？ 時崎狂三』

そう呟くと共に、

「あらあら、気づいてましたの？」

腕を組みながら、影を見つめる。影から現れるのは、赤と黒のドレスを着込み、左右非対称のツインテール。片目は時計のようであり、金色に、もう片方は黒く輝く瞳。

時崎狂三、彼女は友人が封印失敗してしまった、最悪の精霊である。

「ここはわたくしも様子を見ていたのですが、欲しいものが無いようですね」

そう言いながら周りを見渡す少女は、一応は長身と短身の銃を持ちながら、くすくすと微笑みながら、こちらの様子を見る。

『欲しいものか……………』

「気になりますの？ オーデインさん？」

『……………』

「あらあらつれない殿方ですわ」「お返事して欲しいですわね」「うつふふ……………」

影から数名の狂三が出てくるが、興味無く、データコピーが終わり、チップを取り出す。

「この施設からデータを取るのが目的ですよ？」

『私はまだ顕現装置を理解していない、少しでも把握しておきたいのさ。私は知識欲でね。君のことも知りたいな、時崎狂三？』

「あら？ 意外と積極的な方ですわね」

くすつと微笑むが、どちらも戦意、武器を手に持っている。

霊装を纏い、天使を出せる構えの時崎狂三。

モンスターを従え、片手にゴルトセイバーを持つオーデイン。

火ぶたは、簡単に落とされ、施設は爆発した。

「はあ、施設員殺さずに、狂三の相手は疲れた」

十香、四糸乃とよしのん、狂三の後、琴里が実は精霊であり、それも落ち着き、彼女、園神凜祢との一件が終わりを告げた後だった。

見つけた登録されていない、隠された対精霊機関の施設を襲い、いくつも顕現装置のデータやパーツを手に入れた。

ちなみに、違法実験も摘発してやった。表では違法実験所としていまニュースになり、研究員は全て逮捕、会社も潰れた。

「全く、おかげで私の尾を掴む者もないだろう。ま、裏の人間なら分かるがな」

そう思いながら缶コーヒーを飲みながら、ニュースを見て、トーストをかじる。

今日は休日、たまには一人散歩するのも悪く無い。昨晚は久しぶりに身体を動かしたのだし、気分を切り替えに出るかと思いつながら、出ていく。

それが、いけなかった。

「……………ん？」

「にゃ〜♪♪」

「くろまるか」

黒猫のくろまる、この辺り一帯でマスコットの地位を掴み取ったボス猫の補佐官。ボス猫である灰色猫のはいろいろに従う猫である。

その愛らしさに、多くの人からエサを手に入れては、他の猫たちに分け分けする猫であり、はいいろは縄張りを守ると、連携が取れている。

二匹ともよく新入りや子猫をつれてくるため、よく知っている。

「にゃー」

「ん？ また子猫が流れ着いたのか」

「にゃ」

「そうか、いちいち俺に見せなくても良いんだが……………」

俺の周りをうろうろして、着いてきて欲しいと言うくろまる。まあいいと思い、歩き出す。こいつらの住処は多くあるが、この辺りなら、とある廃屋だったなと思いつながら、歩く。

猫の面倒をよく見る野良猫たちであり、時折自分は里親を見つけてやる。そんなことをしている。

そして、そこで見たのは……………

「ああ、もう、仕方ないですね〜♪」

昨晚殺し合いました時崎狂三が、骨抜きになりながら、子猫を膝に乗せて撫で撫でしていた。

「本体ずるいです〜」「わたくし達にも撫でさせてください〜」

そうやって影から顔を出すのは分身体の時崎狂三であり、彼女達も近場の猫達を撫で、陶醉しきっていた。

……………わお……………

内心そう思いながら、気配を消し、くろまるには後日と呟き、全力で物音を消し、静かに帰る。

くろまるは気にせずその輪に入り、より時崎狂三の声がとろけていた。

(……………うん、けして私の存在は気づかれてはいけない)

だが、

「……………」

その時、曲がり角から誰かが、

世界がスローモーションに流れる中で、その人物と、

僅かに、

目が、

合った。

「か」

全力で逃げた。

その日、影から視線を感じる。

建物から視線を感じる。

もの凄く視線を感じて、そして、

「……………」

ああうん、時崎狂三がこちらを見ている。

フラクシナスに連絡して助けてもらうか？ いやと首を振る。

(彼女は先ほどの会話で本体が猫にデレデレだったか知られていないか確認だろうか？ 詳しくは分からないが、ああ言うタイプは自分の趣味を知られたら殺そうとする……………物理的に可能なのが問題なんだよな)

あの時、一瞬だが時崎狂三だった。通り際に片目を見たが、時計の瞳だったし、時崎狂三らしい声も聞こえた。黒いワンピースの、時崎狂三だった。

そして、背後に映る鏡には、ああ、光が消えた瞳でこちらを見る。その顔はもの凄くあれであり、口元がつり上がっていて、いつでも殺せる準備はしている。

(…………やばい)

だがなにもできず、その観察対象になっていた。

その後は何事もなく家に帰り、戸締まりはしつかりとして、シャワーを浴びて、すつきりして、寝床で横になる。

(まあ気にしたら負けだ、気にしたら)

そう思い、今日も今日で静かに寝ることにした。

……………

「あらあら……………寝ていますか？ 神衣さん？」

腹の辺りに何かの重みを感じながら、吐息がかかり、少し女性の香りを感ずる。

(……………どうしよう)

知らないうちに狂三が中に入り、馬乗り状態と言う事態は命の危機しか感じない中で、どうすればいいのだろうか？

とりあえず、これは……………

「……………なにかようか、時崎狂三さん」

「あらあら、おはようございます。それともこんばんわ？ ですかしら？」

月夜の灯りで照らされる、赤と黒のドレスを着た少女。それが微笑みながら、腹の上に乗っていた。

「分からないな、なぜ君がこんなことをしているか分からない。説明を求めるよ」

「あらあら、それは困りましたわね……………神衣さんがわたくしのあんなところを見たのが悪いのですわよ？」

頬を赤く染め、静かに銃を眉間に向けている。これなに？

「乙女のあるな恥ずかしいところを盗み見るなんて……………もうわたくし、こうするしかないんです」

「恥じらいながらやる行動じゃないなっ」

そして引き金が引かれる瞬間、それを避け、狂三を突き放し、急いで窓を壊し逃走する。

「あら酷い、わたくし、勇気を出して来たというのに突き飛ばすだなん

て…………酷い殿方ですわ…………アハツ、アツハハハハハハハハハハ

「これが俗に言うヤンデレか!? いや違うなツ」

「ならこう言ってあげますツ、わたくしの想いを受け取ってくださいまし!!」

どうすればいいのだろうか? そう思いながら走り出す。インカムは置いて来たし、そもそも狂三の一番嫌なのは、あれが第三者に知られることだろう。

いや、だからって命狙われるとは思ってもみなかったよ。

こうしてデスレースが始まった。

「神衣さんどこですよの!?! ちなみに突き飛ばした際、わたくし、胸を触られました。もう殺しても文句は言えないですわね!?!」

「そんなの分からないよつ、そして本当だったらごめんなさい!!」
「死んでくださいっ」

町の中を走り抜ける中、ほとんど身体能力だけに頼りながら、ミラーモンスター達が様子を見に来てくれている。だが、

(こんなくだらないうことで正体が知られる訳にはいかないが、よりそれで殺されるのはごめんだつ。それより、突き飛ばした際に柔らかかった辺り、もう殺されても文句言えない俺……………)

時々空き缶や石を足で蹴り上げ拾い、投げたりして距離や攻撃を防いでいるが、それでも攻撃は止まない。

だがそろそろ……………

「…………つと、インカムは無いが、電話があつた」

私はいつも寝間着に着替えず、すぐに動けるように寝間着ではなく、普通の衣類で寝ている。しわになろうと気にしない。

「もしもし琴里か」

『お兄ちゃん? 狂三の胸触ったくんだりを詳しく』

急いで切った。電話先に鬼がいた。妹ってあんたに冷たく、静かに声出せるんだね。ここ最近新たな発見続き、学者冥利に尽きる。

しばらくしてまた連絡が入った。

「もしもし」

『私だシロウ、琴里は落ち着かせた。なにがあった』

村雨令音、彼女からの連絡だが、

「狂三とトラブルが起きました、命狙われています。理由は言えません、言えばもう狂三は全てを壊すでしょう」

いまもまた、連絡していることに気づき、目を見開き追いかけている。いま俺は屋根や建物を跳び回りつつ、逃げている。

『そうか……………しかし、このままでは君は殺されるだろう』

「……………最悪ですが、通信やカメラ類を全部俺から外してください。この件は他人が関われば関わるほど酷くなります」

『……………いいのかい?』

「いいものにも、彼女には士道に攻略してもらわないといけないので。俺は死ぬわけにはいきません、琴里には何も聞かないで欲しいと言つて欲しい」

『……………』

しばらく沈黙がある中でも、すれすれを弾丸が飛び交う。

『分かった、弾痕などはこちらで処理する。君が狂三の胸を触ったことは聞かないでおこう』

『待って、それは関係ないツ!!!』

だがすでに切れていて、何か向こうは向こうで別の意味で勘違いされてそうだが、

「あらあら、いいんですか? そうですか、優しく殺してあげますわっ」

「もうほとんど側にいた!!」

それでも逃げながら、時間を稼ぐ。対策を考えなければいけない。

森林の中、木々や岩を足場に跳び回りながら、それを避けている。

「以外と逃げ足はお早いですわねっ」

「これでも運動神経は高くなければ、士道のバックアップも何も出来ないと思ってるからね」

その言葉に少しだけ怪訝な顔つきになり、静かににらみつける。

「……………貴方も精霊を助けると言うお人ですか?」

「……………さあね」

正直、俺と言う人格ではそう言うしかない。

「少なくとも、妹のような琴里や、友人である十香、四糸乃、よしのん。そしてバカな幼なじみの手伝いぐらいはしたいと思ってるよ」

「……………」

その言葉に、別の意味で不愉快と言う顔つきになり、引き金を引こうとするが、

「！ 狂三上ッ」

「!?!」

【アアアアアアアア】

突然空から怪物が現れ、それに銃弾を当てて、その場から避ける。

「わたくし達ッ」

すぐに影から戦闘態勢の狂三達が現れると共に、その怪物が武器を持って構える。

撃たれたというのに、あまり効いていない様子であった。

(精霊通常武装での攻撃における、ミラーモンスターの防御力実験を開始する)

その後ろで困惑する素振りを見せながら、内心そう呟いた。

(現れる、ガルドストーム、ガルドミラージユ、ガルドサンダー)

数体のモンスターが現れ、あらあらと呟きながら、軽くくちびるを舐める狂三。

「平気か？」

「全然平気ですわ」

「そうかじゃッ」

そう言っつて、俺は逃げ出した。狂三はそれを見逃し、時計、天使刻々帝を出現させて、戦いを始める。

【ガアッ】

【ヒャ】

【オオオオオオオオ】

鞭を使い、火の鳥のように攻撃するガルドサンダーに対して、それ

を避けながら複数の銃撃をたたき込みながら、その銃を羽根による投擲でたたき落とし、戦斧を振り下ろす、ガルドストーム。

飛行を得意とするガルドミラージュにも、空を飛びながら戦う姿を、ゴルトフェニックスで観察させている。

「ちつ、どこかで観察でもされているのかしら？」

「不愉快ですわねッ」

「仕方ありません、少し本気を出しますか!!」

そう言い、スピードが増したり、うまく回り込んだりした狂三がモンスター達を倒すと共に、それは碎け散り、エネルギーとなった。

「? これは……………エネルギー?」

「!? 本体っ」

分身体の狂三が急いで、光の球体に触れようとした本体を助け出す。ゴルトフェニックスがその分身体を吹き飛ばしながら、その倒されたモンスターを食い終え、その場から去る。

その様子に、あらあらと、

「助かりましたわわたくし」

「いえ、しかし、まさか……………」

「ええ、わたくし達よりも使いやすいようですわね」

倒されてもエネルギーの固まりとなり、本体であるゴルトフェニックスの栄養源となり、また彼らを生み出す。倒されてもまたと繰り返しだ。

「そして本体はその数倍上、その主もまた格別と……………はあ、面倒なことですが、いい情報が手に入ったと、よしとしましょうか」

「ですわねわたくし……………それでは」

「神衣さんを殺しましょう♪♪」

「」「」「まだやるんですの!!」「」「」

「……………」

腕を組みながら、目を閉じていると、廃屋のガラス越しにゴルトフェニックスが帰還して、後始末をしたことを伝える。

これで誤認してくれればいいがと思う。

(ゴルトフェニックスでモンスターを食わせたが、実際はそんなことせずともあの三体は生み出せる……………)

ミラーワールド、あのエネルギー空間がある限り、簡単に作り出せる。元々ゴルトフェニックスと違い、科学者である自身がいればいくらでも作れる。

(作り出せないのは仮面ライダー用の専用モンスター達や、神崎優衣や神崎士郎が生み出したモンスター達。後はオリジナルとも言えるモンスターか)

だが必要を感じない。使い捨ては三種類あれば問題ないうえ、強力なモンスターであるドラグブラッカーとゴルトフェニックスがいる。

「……………とりあえずここでかく」

その瞬間、銃弾が飛来して、それを避ける。

(まだ俺を狙うか!?)

そして今度は雨のように弾丸が放たれ、それを避けながら走る。

「キツヒ、キツヒヒヒッ。だ・め・ですわよおおお神衣さあああぁん……………わたくしの思い、受け取ってくださいまし」

もう追いつかれ、どうするか懐のデツキに触れる。

(仕方ない、ここで狂三を排除……………)

その時、一瞬だが、ある少女の顔が過ぎる。それにデツキから手を離して、仕方ないと、逃げる算段をする。

「狂三っ、俺は別に猫好きな少女は好きだぞっ」

「あら嬉しいことをお言いになりますわねっ、では楽に殺してあげますわっ!!」

弾丸が放たれる中、移動を早める弾丸を叫ぶ狂三。まずいと思った瞬間、すでに目の前にいて、首を捕まれ、宙に浮かぶ。

「それでは言い残すことはありますか神衣さん?」

首締めている状態で聞くことではないなと思いつながら、ミラーモンスター達に待機命令を出しつつ、それを見る。

目が血走ってる。ダメかと思ったとき、

「にゃ〜」

「!?!」

その時、はいいろが子猫を加えて現れた。

「はいいろ?」

「なっ、なんですの?」

突然のことに手を離し、その場にしりもちを付く中で、はいいろは流れ着いた猫一家を連れてきたらしい。とてとて歩き、子猫を俺の手に置いた。

「にゃ」

「あうん、いま取り込んでるんだけど……………」

「にゃ」

「いや、だからな」

まだ猫を置いてくるので、その様子におろおろしている狂三。触りたいのか?と思ひ、一匹取り上げて、狂三に差し出す。

「な、なんですの!?!」

「いや、触りたいのかなと」

「な、ななな、なん、なんですの!?!」

「いや、人慣れするため、はいいろよく家に流れ着いた猫とか、腹空かした猫つれてくるからさ、ほれ」

「にゃー」

元氣よく手足を伸ばす子猫に、ああつと葛藤する狂三。なんなんだから、

「……………はいいろ、狂三に子猫渡してくれ」

「にゃ? にゃ」

「えっ、えっ……………」

その後、狂三のために、割愛します。

「い、いいですかっ。このことを誰かに言ったら殺しますので、いいですわねっ」

そう言つて、狂三は帰り、俺ははつきり言う。

「なんだったんだ……………」

「にゃー」

こうして猫に始まり、猫で終わった事件であった。我が家の縁側にはいつものように、野良猫たちの集まりであつたりと、猫集い場である。

はつきり言えばいつからこうなつたんだろうか？　ともかく、猫の扱いがうまくなつたのは、この世界に来てからだ。

「琴里、痛くないか？」

「うん、へいきなのだよお兄ちゃん♪」

膝枕をして耳掃除しているいまの自分、猫のように甘えてくる気分屋の妹。

この前のことやら色々と言明できないことがあるため、こうして雑務など言うことを聞く。

「神衣っ、今日はプリンがいいぞっ」

「わたしは………ホットケーキが、いい、です………」

「神衣、飯の方俺が作るか？」

「ああ頼むよ土道」

こうして友人達と共に、家で過ごす中、膝の上の猫の髪を撫でながら、ため息をつく。

「マジでなんだつたんだろうな………」

ちなみに時々我が家に狂三が来ては、猫と戯れるのは俺も知り得ない情報であつた………

真那・サポート

それは美九の事件が終わった日のことだ。

町にはなっていた従者モンスターが反応、町に出ると、

「お、お腹が減りやがりました・・・」

友人の実妹がそこにいた。

私の名は神崎神衣、仮面ライダーオーデインであり、この世界で精霊研究をしている者である。

我が家には居候半精霊が二人居るが、いまは外出中、フラクシナスで身体検査で帰れない。そんなことを考えながら、ご飯を食べさせていた。

「助かりましたっ、とてもありがてーです」

「君の日本語がおかしいが、まあいいよ」

そう言いながら軽い物を食べさせた。彼女の方は琴里経由で、兄の友人と知り、嬉しそうにご飯を食べている。

彼女は高宮真那、年齢は琴里くらいだろうと思われる、我が友にして、利用対象、五河士道の実妹らしい。

本人も当人もよく分からず、本人に至っては記憶がすっぽり無いらしい。だがペンダントに士道の幼い頃の写真がある。

だが、それに首を傾げながら、見せてもらい返す。確か、この頃にはすでに五河家に引き取られていたはずだ。この写真はおかしいのだ。

それでも問題はそこではなく、彼女の元所属先。彼女は精霊を撃墜する組織と銘打っているが、怪しき満載の機関に所属。その上、違法、限界突破の肉体改造されている。そのおかげで実力者であるが、かなり身体はボロボロだ。

確か色々な事柄があり、琴里が手を打っているはずだが、そんな彼女に聞く。

「で、なんでフラクシナスで保護されているはずの君が町中でお腹を減らしていた？」

嬉しそうな顔の少女だが、

身体が軽い。

(これであの機器を運用できるはずがない、脳への負担も高い……：……
全く)

精霊と言う、巨大なエネルギーの固まりと対峙する武装をするに
しては軽すぎる肉体。筋肉もそんなにない、ただの女の子。

歳相当の少女を布団に運び、静かに考え込む。

「……………はあ」

嬉しそうに寝言を言う少女、服は仕方ないので男物で悪いが、昔の
服をいくつか置いておく。まあ着替えないだろうが念のためだ。

見た目健康そうだが、明らかに寿命を削ってるのだろう。そんな子
を見ながらため息をつく。

やることは一つだが……………

朝日と共に起きる真那。すぐに行動に移る。

「それではおいとまさせていただきますです」

そう言いながら、静かに出ていこうとするが、自分の靴がちやんと
揃えられていて、財布が置かれている。

「? なんでいやがりますか?」

『これを持っていかなかったら琴里に話す』と言う手紙と共に、大金が
入ったお金が置かれていて、あわわあわわする。

「これは……………ううっ……………」

しばし葛藤する様子を見せながら、しかも軽い軽食も置かれてい
て、渋々財布を懐にしまい、それを食べていく。

複数用意されていた衣類を着ていた。さすがに着替えたかったの
だろう。着ていた物も持っているが、これで準備万端と言う顔で出
ていく。

その様子を鏡の中から見ている。

「さて、これからどうナイトメアを探し出しやがりますか」
休みの日とはいえ早朝、男物の服装の少女は、スキップはするもの、人目を気にして移動する。
だからか、すぐに気づく。

「……………」

妙な視線を感じる。

真那は正直気分がよかったのだが、一気に不機嫌になった。
顔色は変えないが、スキップはやめて、すたすた歩く。

「……………」

仕方ないので、町の人気のない道を選び、誘い出す。妙な輩なら叩きのめし、ナイトメアなら返り討ちと考えていた。

だが、

「はい？」

人気が無くなると共に、自分を困むのは怪物だった。

鏡、窓ガラス、何かに映る全てから、それらが現れる。

「これは……………オーデインでいやがりますか？」

『そうだ、崇宮真那』

仮面ライダーオーデイン。この世界以前、ある世界で膨大な実験、人の蘇生のため、多くの命と人生を狂わせ、利用した研究者のもう一つの顔。

この世界に置いては、完全な異物として活動。精霊研究と言う命題のもと、精霊事件に関わる研究者。

「なにかようでいやがりますか？ 正直、気分良かったのが台無しでいやがります」

不機嫌に頬をふくります真那は、内心どういう意図だ？と考え込む。彼は敵でも味方でも無いだろう。

（兄様達を利用する関係から『味方』でいやがりますが、ナイトメアを殺そうとする自分は『敵』と認識してもおかしくねえですからね）

正直な意見、琴里からも話を聞き、裏表無いと言う評価をしているため、正しく彼を見る。

『そうか、そんなに彼と関わるのが楽しかったのか？』

「……………のぞき見とは悪趣味ですね」

訂正、敵だと言う印象で睨む。

そんな不機嫌な少女を無視して、鏡から出てくる。

『私は商談しに来たんだが』

「この身体が目的でいやがりますか?」

と、ぶつきらぼうに冗談で言うが、

『ああ』

即答した。

「……………」

そして真那は顔を真っ赤にして、すぐさま壁際に移動して、少女らしい、震えながら、いまでも悲鳴上げそうにこちらを見ている。

『正確には、DEMが君にした薬剤などのデータが欲しい』

それに、へっ?と言う声をもらす真那。こちらはこちらで彼女をか
らかう。

くつくつと笑いながら、からかわれたと言うことに気づき、憤慨し
そうになるが、周りにはモンスターがいて、静かに睨む。

「どういうことでいやがりますか?」

『こちらはこちらで、君らが普段使う装置の技能は知らない物が多い
のでね。色々と試験者が欲しい。人材不足と言うものさ』

「ああ、そうでいやがりますか」

『時給は一週間で10万でいいか?』

「ブツフォ?!?!」

あまりの[!]高い給金に吹き出す真那。私は別に金に困っていない。
ぶつちやけ何年口座を使い分けて、株だのなんだので資金を稼いでい
ると思う?」

使い分けたり、海外戸籍もあつたり、色々大金を所持できるよう、こ
の世界に来てから手を回しに回している。何人存在しない人間が、大
きな会社から、小さな会社を経営している。権利などもある。

その為、いまずぐ億単位の資金が必要になっても、少し時間があれ
ば用意できるし、金や宝石類に変えたりして保管もしているため、で
きる。

無論、悪い方には手を出してはいない。それは面倒と言う意味合いが強い。変なところで法を守るのは、自分でもよく分からない。

『無論、住処も用意する。装備の方は、まだ待つて欲しいが』

「えっ、えっ、えっ!!? えっ!!?」

混乱している、相手がこうなれば、こちらのものだ。

大金一つでここまで動揺するのは、少し心配だな。

『後は君の身体の治療だね、五河士道の情報も流そう。無論、ナイトメア、時崎狂三の情報も』

彼女はすぐに食いついた。

本当に私としてはいいが、俺としては少し不安だよこの子。

「……………このマンションでいやがりますか?」

ブレスレットに話しかける。それはなんも変哲もない、その辺にある、『銀の』ブレスレット。

『ああ、ここは私が買って運営しているマンションだ。なんにも問題ない』

「マンション事態があんたのでいやがりますか……………」

高級マンションであり、セキュリティなどちゃんとされていて、真那はマスターキーを受け取りながら、ここで過ごす。一人暮らしにしてはあまりに広すぎる部屋だ。

家具ぐらいは用意できていたため、それにもう開いた口がふさがらない様子だ。

『一応君の年齢考えての配慮だ、あと、連絡用の通話機だ。警護は中は何もしない、外でモンスターは配置してるが、プライバシーぐらいは保証する。後は前金だ、これで消耗品や衣類関係を自分で買ってくれ』

「カード!?! カードで問題ないんでいやがりますか!!?」

『問題ない口座だから好きには言わない。君自身の年齢で使っても問題ないよう、払う金額は気を付けるように。中身はまあ、かなりあるとは言っておくよ』

その辺りを踏まえていれば、好きに使うと良いと言うと、顔が晴れ

やかになっていく。

「優遇過ぎる……DEMやめて本当に良かったです」

そんなこと言いながら、後は血液サンプルを取りながら、ともかくデータを取る。後はこれから治療などの方も視野に入れる。

『隣の部屋がそう言った薬剤研究しているから、後で、宅配便で大型の鏡を送る。問題ないときは布を外してくれ。そこ以外から部屋を覗くことはしない、一部屋は交流用にしておくよう』

「了解です、あつ、後は」

『無論、このことは話せる奴には話しても構わない。では』

「交渉成立です」

そう言って、今日は終わる。

『というわけで、携帯など色々便利になりやがりましたので、心配しねえでください』

「……………そうか」

俺に電話する真那は、ウキウキしながら、向こうで何か食べたりにしている。

電話番号教えていないのだが、まあいい。

『いつやくあの後すぐに服とか買ったたり、フラクシナスの方にも連絡しやがりました♪ あとはご飯も美味しいでやがりますから、病院より気楽でいやがります♪♪ 琴里さんには悪いですが、しばらくはオーデインのもとですね』

その話を聞きながら、フラクシナスにも連絡している辺り、村雨さん辺りかと考えながら、後は武装なども届けるかと思う。色々と私として考える中、俺として、

「けど無理はしないでくれよ、真那ちゃん」

『はいっ、それじゃ今日はこれくらいで』

そう言って切る通話。しばらく研究所で血液サンプルから、ワクチンなど、むしろ薬を使わずに、スペックを落とさず、彼女が戦えるようにする。

「私としても有意義だよ、真那」

そう言いながら、私としても俺としても、静かに彼女用に色々作り出す。

「ふ〜……………しよ〜じき琴里さんには申し訳ねえいやがりますが、ここにいればまだ戦えやがりますし、しばらくはいますかね」

そう言えばと、

「連絡できるようになって私、なんで神衣さんの番号聞いたんでいやがりましたか？」

そう思うと、少しだけ考え込む。フラクシナスに連絡した後に聞いて、その時についでに。確かに迷惑かけたのでそうすれべきだろう。そして手を叩く。

「そうかつ、兄様と同じような方ですからね〜だからです、そうで違いありませんっ」

そう満面の笑みを浮かべながら、一人にしては大きく、ふかふかなベットに倒れ、静かに目を閉じる。

「しばらく豪華に過ごしますか……………お休みなさい兄様、神衣さん……………」

少女はそう言い、幸せそうに眠りにつく。

翌日、帰ってきた居候精霊達を出迎えると、

「なぜか漠然と殴りたくなつた」

「何故だ？」

半精霊の同居人にそう言われて、私は殴られた……………

オーデイン・ライフ

全てをことを話してしまい、隠すことが無くなった今日この頃。

神崎神衣、異世界で時間を操り、蘇生実験の協力者だった男。現在来禅高校の高校生になり、精霊と言う存在の真相、世界の真相を知る為に暗躍する。

現在、多くの肩書きを持ちながら資金を集めたり、半精霊となった者達と共に住む。

「……………布団に何かいる」

目が覚めると、すうすうと寝息を立てている娘とも言える存在。園神凜緒。ピンクのパジャマ姿で、静かに寝かせたまま、起きあがる。

最近寒いと思いながら、リビングに出向くと、或守鞠奈が、エプロンを付けて作っている。今日の当番は彼女のようなのだ。

「ああ神衣おはよう、凜緒知らない？ 凜緒に聞いても知らないのよ」

「私の部屋で寝ている」

「……………最近神衣の部屋ね」

「あつはは……………」

苦笑する凜緒と、少し部屋から抜け出す子にどうするか考える万由里。別に気にすることではないだろうと思いつつ、椅子に座る。

「十二月の始まりであるのバカが余計なことしなければ、もう少し平和だったんだが」

「どうしたの？」

「少しね……………秘密主義なもんだから」

「言う気がないのならベーコン一枚渡さないわよ」

「鞠奈ちゃん、神衣の場合、それ意味無いよ」

そんな話の中、コーヒーマグが淹れられたためそれを飲もうとした際、その手を止めた。

そして、

「か、神衣っ」

五河士道。精霊の希望とも言える彼が慌ててやってきた。

「どうした」

「な、七、七罪がないんだ!! 知らないか!？」

「七罪はミラーワールドにいるぞ」

「そうか知ら、って知ってるのかよ!!」

その場に座り込み、凜祢が水を手渡し、それを飲ます。どうも七罪がいなくなつて驚いていたらしい。

だが、ミラーワールドにいたので安全だ。

「だがどういうことだ?」

「ん? どうしたのよ」

「いや、きちんと連絡はしろと言っていたはずだが……少し見てくる」

そう言つてミラーワールドの研究室、七罪がいる部屋に向くと、

『拝啓お兄ちゃん、私はこの世界の住人になります』

変な手紙が置かれていました。

「…………マジか」

「というわけで全員で着ました」

精霊達は鏡あわせの世界に驚きながら、ポーズを取る耶具矢はくつくつくと笑う。

「ここが鏡像成る世界か、その名の通り、左右が真逆の世界よ」

「解説、耶具矢のツボらしく、気に入ったようです」

「まあいいが…………」

そう言いながら、指を鳴らすと共に、無数のモンスターがあらゆる場所から出てきて、全員が驚き、琴里は呆れながら聞く。

「これ全部?」

「眷属モンスターと言う、ゴルトフェニックスの羽根から創り出した使い捨てだ。数は揃えた。施設関係を探せ、見つけた場合、報告のみしろ」

そう指示すると、咆哮を上げて飛び立ち、去るモンスター達。その様子を見ながら、耶具矢が目を輝かせている。

「ここが、ドラグブラッカーさん達の世界ですか?」

『静かだね』

「当たり前だよ四糸乃、よしのん。ほら」

手をかざすと、お店のウインドの向こう側が見える。こちらが見えないため、おくと言う声が拳がる。

「……………これ使って情報集めたりしてたのね」

「ああ」

気にせず、妹に返事する。これだから彼らオーティン派閥は情報戦に置いて、一つ上に行く。常に鏡、鏡面に気を付けなければいけないが、それが何が条件か分からない以上、ただ精神が削れるだけだ。

故に仮面ライダー正義派とも言える者達は、多く活動するし、犯罪をする者達は簡単に食いついた。

「鏡面世界であるミラーワールドは、簡単に知ることができる、隣の世界。そこからの驚異に誰も気づかないからこそ、正義感から戦う者も居れば、悪意で使用する者もいる。なにより、鏡はモンスター達にとっては出入り口だが、獲物にとっては壁なんだよ」

一人の仮面ライダーを思い出す。彼は巨万の富を求め、仮面ライダーになるが、たまたま戦いが終わる前に叶ってしまう。

だがらと言つて、戦いから下りることは許されず、契約モンスターの所為で戦うことは余儀なくされ、

「結果、ミラーワールドでデツキを壊され、出入りする権利を失った」
「出入りできないとどうなるのだ？」

「いまのミラーワールドは現状、エネルギー変化や蓄える法則は無いから起きないが、ミラーワールド外からの者は、ライダーですらタイムリミット付きで長く存在することは許されない。いずれエネルギーに返還されて死ぬ。彼は届かぬ声を鏡越しの人々に叫びながら、リミットが尽きて退場した」

それに全員が青ざめたが、気にせず歩く。

鞠奈はあきれ果てた顔で見る。

「よくもまあ、んなとち狂った実験してたわね……………笑えないわ」

「それほどまでに、神崎士郎は、妹の蘇生に執着していたと言うことだ。私からすればどうでもいいが、人の蘇生ができるのかには、興味はあった」

「興味があつたつてだけで、自分の肉体を他人に渡して、精神だけになつて研究し続ける……じゆうぶん狂気の沙汰よそれ」

「褒め言葉として受け止めよう」

それと全員、オーデイン口調の彼に戸惑いながら、この世界、現時点のいまについて聞くと、

「一部の施設は電気、水道などを使えるようにしている。研究用にな」
「疑問、家だけじゃないんですか？」

「家のはカードとデッキの調整などしかない。顕現装置の実験施設、サーバー保管庫のような施設をいくつか。七罪がいるのは、そのビルなどのどこかだな」

「なぜだ神衣？」

「そこ以外に食料は愚か、トイレなどの施設が利用できない」

まさか、ネット廃人の極みがするよう……

考え込もうとして首を振る。そこまでしないはずだ。数名同じことを考えて、同じことをしているが、ぐっひひと微笑む人がいた。無視する。

そしてモンスター咆哮が響いた。

「やべ、顕現装置施設だ」

「なんかあるの兄ちゃん？」

「可愛い琴里のために、顕現装置のミサイルやら拳銃やら砲台とかあるから、下手すると」

「危険なのか!？」

「いや、七罪が使用して反撃される」

「そっちかよッ!!」

ちなみに素人でも町一つ制覇できるように武器貯蔵は完璧だと親友に言うと、あのと呆れられていた。

ちなみに、

「来るなああああああああああ」

すでにモンスター達にライフルを発砲している七罪を発見して、ほぼ全員があくと言う顔をしていた。

「よしまず交渉する人決めて行くか」

「では私が」

「すまん誰か美九を羽交い締めしてくれ」

「ご褒美なので問題ありません」

される準備しているため、十香に頼み、話し合う。

「な、七罪さ〜ん〜」

『七罪ちゃん、立てこもって無いで出てきてよ〜』

『ぐっおおお卑怯よお兄ちゃんっ』

早速切り札を切ることにした。とりあえず十香に抑えられた美九を見ながら、静かに説得を開始して、結果早くも折れる。早いな。

「念のために先に入るぞ、四糸乃やよしのんを入れた瞬間、また動き出すぞ」

「ええ行きましょう」

部屋の中はすでに勝手に改造されていて、ルーム化している。

下手人はとりあえず猫のように持つておく。

「お兄ちゃん、なにがいけないの？ 私はお兄ちゃんの妹よ？ なんでこんな、なにが足りないの、お風呂とか入って背中流したりすればいい？」

「せんでいいせんでいい」

「お願いしますっ」

美九は外に出すかと琴里に話しつつ、ここの兵器類や武器類に呆れる。戦争できるレベルでそろえてる。

「こんななんどうして用意してるんだ？」

友人の言葉に、

「趣味」

「おい待て」

そんなことを言われても、

「精霊の研究も、顕現装置の武装研究も、エネルギー研究もはや趣味だ。私と言う生き物は何かを創り続けることが呼吸のようなものだ」

「だからって」

「安心しろ、戦争する気も無い。もう戦いは面倒だからな」

理由もあれだが、真実しか言わないため、呆れられる。

そう言えばと、

「そう言えば、琴里の方に色々手貸してるわね」

「正確には鞠亜だよ鞠奈」

それを驚く、琴里も少し得意げに微笑みながら、まあ待てと言っておく。

「ともかくもう出よう。七罪、ここはこのままでいいから、勝手な行動しないでくれ」

「お兄ちゃん……………あれ、なんとかして」

ただ無言で見つめる美九に対して、ここに来れないから問題ないとはか言えない。

最近もういいと言わんばかりに、隠そうともなにもしない。

とある戦艦のルームで、機械をいじり、調整なりなんなりしている。

「これでどうだ？」

そして一人の、白い衣類を着こみ少女が目の前にふわりと現れた。

「身体に違和感は無いか？」

「……………問題ありません、フラクシナス内のカメラ並び、私自身の目が視界として機能してます。神衣」

そう言って微笑む少女は、映像装置を使った、この船のAIである『マリア』だ。

それに微笑むと、ふわりと抱き着いてくるため、受け止める。

「感触並び、嗅覚などの五感も問題ないようです。私の感触はいかがですか？」

「普通の女の子に抱き着かれたようなものかな？ 私からすれば娘のようなものだが」

「……………」

その時、目からハイライトが消えたような気がしたが、瞬間、蹴り飛ばされる。

そこには同じように目から光を失った妹琴里と、武器を構えた鞠奈がいた。

「鞠亜、なに抜け駆けしてるのかしら?」

「いえ、チャンスと思いましたが」

「お兄ちゃん、そう簡単に女の子に抱き着くのはいかがかしら?」

そんな様子を見ながら、文句なりなんなり言われつつ、まだまだ調整しなければいけないと伝えておく。

「お願いします神衣、私のことをお願いします。隅から隅まで」

「おいっ」

「お兄ちゃん?」

「私がなぜ怒られる?」

「もうここまで知られたからには、責任を取っていただかないといけません。私は神衣の物ですから……」

頬を赤くして言うと、琴里に首を絞められながら、淡々と仕事する。

鞠奈はソードベントで出した剣を地面にかん、かんと時間を置き叩くなど、まるで王蛇のようだった。

色々なことを知られ、知り、行動に移る中で、けして変わらない。

仮面ライダーオーデイン、神崎神衣は、精霊の真実を知る。

いまはただそれだけである。